

# ジェネリックスキルとしての 「ふりかえり」について

—中部地区私立大学薬学部での取り組み事例をもとにして—

発表者：米津 明人 (KEI アドバンス)

発表者略歴：2007年より、中部地区の私立大学3大学5学部で初年次教育講座を担当。各講座のカリキュラムや教材の作成なども行っている。

## 1.はじめに

大学の講座だけでなく、初等・中等教育の中で、あるいは社会に出たあとでも、「ふりかえり」が重視されていることから、ジェネリックスキルとしてこれを養成していく必要があるだろう。実際に本学会においても、藤田(2008)や中(2018)が「ふりかえり」実践事例を報告しているが、「ふりかえり」そのものを直接的に議論するまでには至っていない。今回の発表は、問題点と実際の取り組み事例を提示することで、「ふりかえり」そのものを正面から取り扱い、議論の活性化を期待するものである。

## 2. 「ふりかえり」が抱える問題点

実際の授業の中で「ふりかえり」を扱っていく際、そもそも「ふりかえり」とは何なのかを分析し、どのように授業設計の中に組み込んでいくかを検討していく必要がある。今回は、おおきく3つに分けて検討をしていきたい。

### ① 教育者側の共通認識不足

「ふりかえり」という言葉を聞いたとき、我々は何をイメージしているのであろうか。単純な確認や復習のことをイメージするかもしれないし、復習の中での「気づき」の発見に焦点を当てているかもしれない。その「気づき」も、実際に目に見えるようなものから、自己の内面の変化まで多様である。教育者個々が持つふりかえりのイメージが異なっていれば、教育者間での議論も的を射ないものとなってしまふ。前提として、発信する側がどのような狙いのもと「ふりかえり」という言葉を伝えていくかの認識をしておかなければならない。

発表者は、「ふりかえり」とは、「単に過去の出来事を確認することに留まらず、これまでの行動や思考を整理し、未来に向けての推進力となるようなまとめを行うこと。気づきを言語化・抽象化しようと努力することで、自己の中に経験を定着させる行為。」という意識のもとプログラム作成を行っているが、「ふりかえり」とは何かについて議論できればと考えている。

## ② 受講者側の必要性の認識不足

実際の受講者は「ふりかえりをしなさい」といわれた経験がある者が多い一方で、なぜふりかえるのか、どのように行くとよいかなどの指導を受けたものは少ない。初等・中等教育のなかでも触れてきたであろうと説明を疎かにしてしまうと、単にやらされているという印象だけがつきまとい、効果的なふりかえりとはならない。大学初年次教育の中で、改めて「ふりかえり」の重要性や必要性を伝えていく必要があるだろう。自己の成長のためのスキルであることを明確化することで、「ふりかえり」そのものへの取り組み方も変わってくるのではないか。

### ③ 指導のためのシステムの不備

これまで、「ふりかえり」そのものを議論するという場面が少なく、どのように指導していけばよいかという話し合いも多くなかった。そこで、「ふりかえり」をジェネリックスキルと位置付けた上で、実際にどのように扱っていくかを議論していきたい。

先の藤田(2008)の例では、特に「気づき」に焦点を当てた実践事例が挙げられている。「気づき振り返りシート」を利用し、授業プリントに記入した「気づき」を振り返る作業を毎回行うという手法をとっている。また中(2018)も、各回に作成した「ふりかえりシート」を、最終回に眺めながら「全体のふりかえり」を行っている。これらの事例から導かれることとして、ふりかえりに連動性を持たせることの重要性が浮かび上がる。各回の振り返りを単発的なもので終わらせるのではなく、前後の文脈の中に位置づけることで、より経験の定着につながるものと期待される。また、このようなしかけをしておくことで、講座を修了した後も持続的にふりかえりができる学生となっていくのではないだろうか。

### 3.実践事例

以上のことがらを踏まえ、実際の授業の中では次のような取り組みを行った。

#### ① 受講生への指導

まず、「ふりかえり」とはなにかを「気づきを言語化・抽象化しようと努力することで、自己の中に経験を定着させる行為」と伝えた上で、ふりかえる項目として「主体」「内容」「期間」の3つを提示した。

実際に担当している講座では、4～5人のチームによる活動を行っている。「主体」とは、個人についてのふりかえりなのかチームの行動についてのふりかえりなのかということである。実際に考えていることが、どの視点でのふりかえりなのかを意識することを促している。逆に、情報を整理する際に「個人としてはどうだったか」「チームとしては何が起こっていたか」と考える指標とすることもできる。

「内容」では、授業内でできた成果についての良し悪しを検討したり、成果を得るためのプロセスについて考えるように伝えている。特に、プロセスについては、こちらからの提示がないと目が向かない学生も多い。形として見えるもの以外のところ

ろに重要なものが隠されていることを感じてもらうようにしている。「期間」では、90分の授業での出来事なのか、1週間での取り組み状況なのかを意識して整理するよう指示している。

## ② 「ふりかえり」の3重構造化

「ふりかえり」を単発的なものとしないうために、以下のように実施をしている。

### ・「ふりかえりシート」

「ふりかえりシート」と翌週用の「MEMO」を両面印刷とした。毎回シートを回収後、授業担当者がコメントをいれることで、翌週に自分の書いた「ふりかえり」を見直す機会となる。また、授業中にも適宜前回の「ふりかえり」内容を確認しながら作業が進めていく学生の様子が見られた。

The image shows a two-page form. The left page is titled "ふりかえりシート" (Reflection Sheet) and contains the following fields: "月 日 曜日 限 教室 チーム" (Month, Day, Day of Week, Class, Classroom, Team), "学籍番号" (Student ID) and "氏名" (Name), and a box for "今講の中での気づきとそれに対するあなたの考えを書いてください。" (Please write your insights and thoughts during the lecture). Below these are several horizontal lines for writing. At the bottom, there is a box for "◆講師への質問・メッセージ、授業の感想など" (Questions, messages, and impressions for the instructor). The right page is titled "MEMO" and is a blank space for notes.

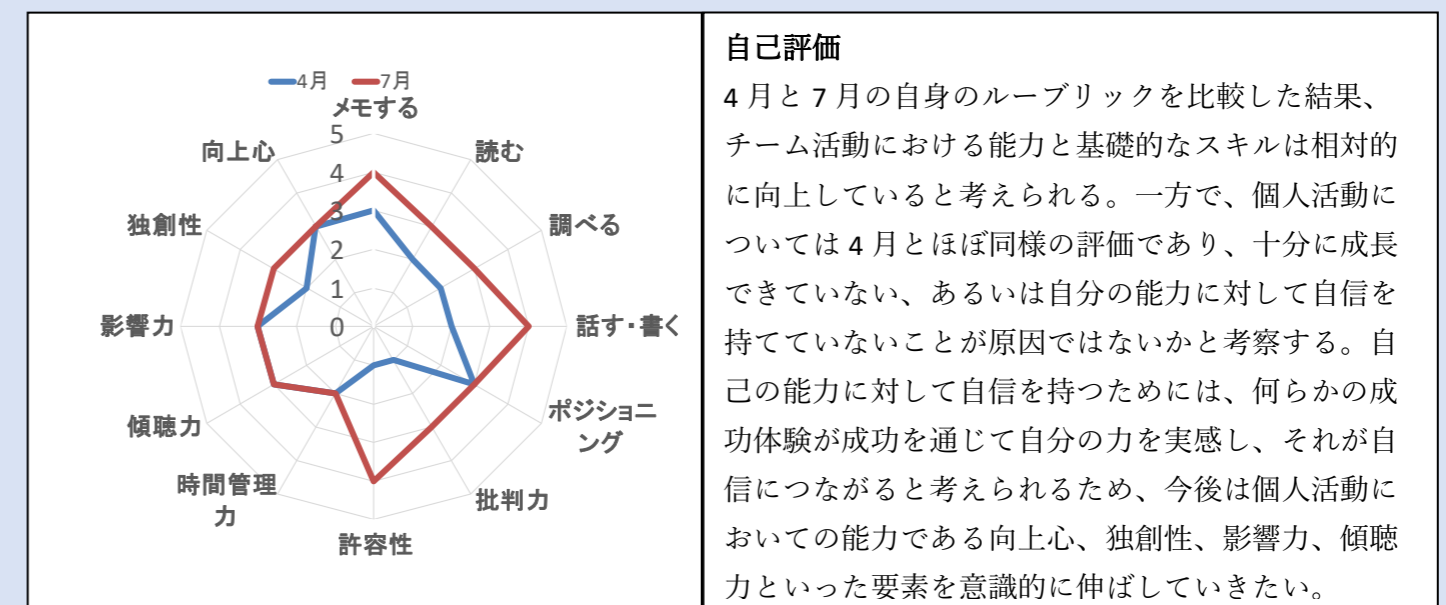
・テーマ単位での「リフレクション」

各回に作成した「ふりかえりシート」を確認しながら、リフレクションを行うよう指導した。これにより、数週間分のふりかえり内容を俯瞰する機会を与え、さらに「ふりかえり」の連動性を高めた。毎回のふりかえりとは異なり、ふりかえる項目をより明確に提示し、自己の課題を見つめるように促した。

第2講～第4講 課題内容に対する資料検索をふりかえる	調査の中で、難しかったことや苦勞したことを書きなさい。
	資料検索を経験したことによって、気づいたことや身についたことを書きなさい。
第5講～第6講 レポート作成をふりかえる (アウトライ ン・下書き・ 提出を含む)	レポートを作成する過程で、難しかったことや苦勞したことを書きなさい。
	レポート作成を経験したことによって、気づいたことや身についたことを書きなさい。
第1講～第6講 をふりかえる	第1講から第6講までの授業を終え、あなたにとって今後の課題は何ですか。

・講座を終えての「ルーブリック評価」

半期の授業を終えた段階で、自己の成長についての「ふりかえり」を行った。右のような12の項目について成長度を判断し、今後の課題について記述してもらった。

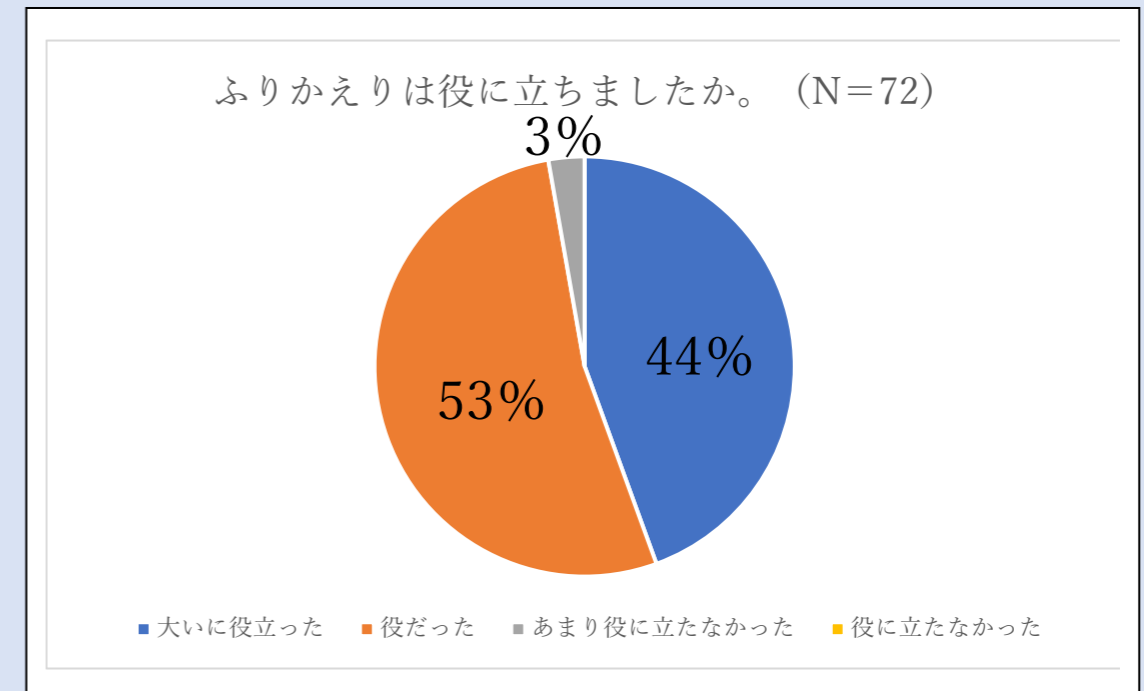


**自己評価**  
4月と7月の自身のルーブリックを比較した結果、チーム活動における能力と基礎的なスキルは相対的に向上していると考えられる。一方で、個人活動については4月とほぼ同様の評価であり、十分に成長できていない、あるいは自分の能力に対して自信を持っていないことが原因ではないかと考察する。自己の能力に対して自信を持つためには、何らかの成功体験が成功を通じて自分の力を実感し、それが自信につながると考えられるため、今後は個人活動における能力である向上心、独創性、影響力、傾聴力といった要素を意識的に伸ばしていきたい。

実際の学生のコメント

## 4. 受講生の反応

半期の授業が終了した段階で、2024年度の受講生に対するアンケートを行った。「ふりかえりシートを毎講書くことは、役に立ちましたか。」という問いにたいし、「大いに役立った」「役立った」と答えた学生の割合は97% (70/72)であった。多くの学生には、「ふりかえり」の有用性を感じてもらえたようである。



## 5. おわりに

AIが急速に発達する中、レポートなどの成果物を完成させること自体は容易にできてしまう。その中で、自分がどのように成長しているか、どこに課題があるかを確認することが重要ではないか。「ふりかえり」というスキルをどう養成するかを基軸にして、講座設計をしていくこともできるのではないだろうか。

## 参考文献

藤田哲也(2008) 「法政大学における初年次教育モデル授業公開について」

初年次教育学会 学会誌 第1巻第1号 P81-88

中義則(2018) 「科目の本質理解と共同性を深めるプロジェクト型アクティブ・ラーニングの研究実践－「メタ認知」の自覚化を中心に－」

初年次教育学会 学会誌 第10巻第1号 P132-141